

説教余滴、スペインその3

1492年10月、新大陸発見後、多くのスペイン人たちが大西洋を渡り中南米に行きました。多くは旧大陸では食い詰め者、新大陸ではコンキスタドル・征服者となりました。先住民の金銀財宝と命を、残虐な手段で根こそぎ略奪しました。国王のため、教会のため、国庫のため、自分のため、蓄え、国許へ送りました。現在も残るスペインのインフラは、この時代に、この富を用いて整えられたものと聞きます。更に教会堂や無敵艦隊、宮殿も整備され、多くの美術家を支援し、傑作が残されました。

紀元16世紀、スペインは一举に豊かな国になりました。王侯貴族だけではなく一般庶民もその恩恵に浴しました。トマト、トウモロコシ、タバコ、カカオ、ジャガイモ等、旧大陸では知られていなかった数々の産物を入手しました。その陰で、どれほど残虐非道なことが行われていたか、宮廷人や出資者たちの多くは知らなかったようですが、司教ラス・カサスの『簡潔な報告』によって初めて知ったようです。

この書の母体となるものは1542年に、国王に宛てて提出されています。それより前、1510年には、エスパニョーラ島で初ミサを行い、翌11年末アントニオ・デ・モンテシーノスが、インディオに対する征服者(コンキスタドル)や植民者の非道な行為を非難する説教を行っています。

ラス・カサスは、1513年にはキューバ島征服に従軍司祭として参加。報酬として島内にエンコミエンダ(奴隷農園)を得ています。1514年にはキューバ島総督ベラスケスより聖霊降臨節説教の依頼があり、聖書を熟読、エンコミエンダ制の撤廃こそがインディオの惨状を救う唯一の策であるとの認識に到達。8月15日、自分の所有するインディオの解放を公にします。

スペイン王国の利害に関する事案で、ここまで大胆に発言し、行動するラス・カサスは大したものです。